

1. 背景

現在の義肢は支給基準制定時に比べて大きく進歩し、対象者も拡大している。

義肢の進歩がもたらしたもの

- 切断者の活動性の向上
- 従来は適応困難であった切断者への適応

➡ 切断者の社会参加の促進



納税者として公的費用の還元

- 制度制定時には想定されていなかった新たな状況

■ 義肢の進歩

- ✓ 材料の進歩
 - ✓ 部品の高機能化・多機能化・高額化
- 選択肢の多様化により形式・材料・部品の選定にかかる時間・技術が必要。

■ 切断原因の変化

- ✓ 従来は外傷性切断者が主であったが、現在は糖尿病等による末梢血管障害による切断者が増加し、適合調整が難しくなっている。
 - ✓ 医療・義肢の進歩により従来は適応外であった切断者にも義肢の適応が可能となる一方、難症例が増加している。
- 義肢の適合と調整により高い技術が必要

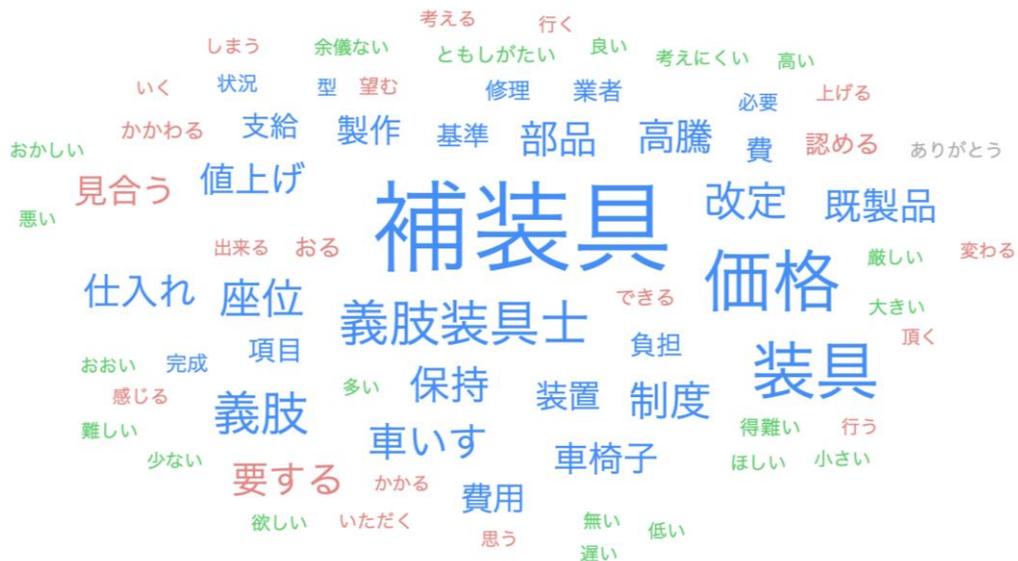
2. 支給基準の課題：R3-4年度厚労科研調査より

A) 補装具製作事業者が抱える課題

補装具製作事業者への価格実態調査における自由記載コメントをテキストマイニングにより分析

※コメントには訓練用義肢に関するものも含む

ワードクラウド（文字が大きいほど出現頻度が高い）

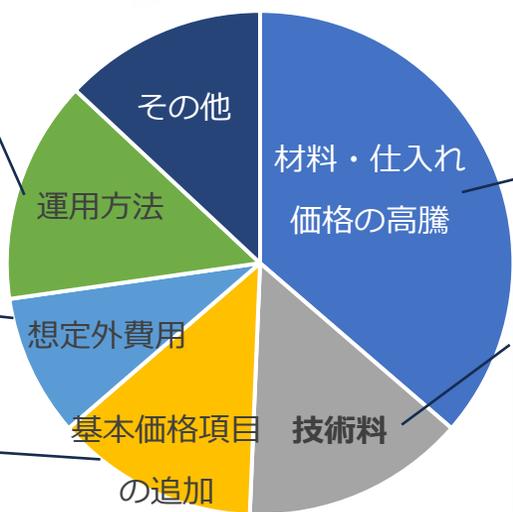


係り受け解析（スコアが高いほど重要な関係）

名詞 - 形容詞	ネガポジ	スコア	出現頻度
負担 - 大きい	中立	1.09	3
価格 - ほしい	ネガティブ	0.60	3
製作 - ほしい	ネガティブ	0.60	3
利益率 - 低い	中立	2.00	2
価格 - 高い	中立	1.50	2
素材 - 高い	中立	1.50	2
補装具 - 無い	ネガティブ	0.86	2
制度 - 無い	ネガティブ	0.86	2
名称 - 無い	ネガティブ	0.86	2
種目 - 無い	ネガティブ	0.86	2
コード - 無い	ネガティブ	0.86	2
交通費 - ほしい	ネガティブ	0.30	2
ケース - 多い	中立	0.29	2
基準 - 安い	ポジティブ	1.00	1
経営 - くるしい	ネガティブ	1.00	1

コメント内容の分類

地域格差
判定基準が不明確 など



出張料、搬送費用、
フォローアップ費用の
支出増など

種目・項目が実態と乖離
新たな形式の追加 など

価格高騰の実態については第1回WGで報告済み

- 義肢装具士と無資格者の区別が価格基準上なく、国家資格の優位性が反映されていない。
- 義肢装具士の適合調整技術料を設定すべき。
- 部品の選定と調整には高い技術が必要であるが、対価がない。
- 利用者のために丁寧にやればやるほど赤字になる。

B) 支給基準の想定と現状との乖離に関する考察

① 現在の基本工作法に基づく問題

- 義肢一具の製作作業工程手順 → 一具の製作費用のみが算出
- 作業工程に重点が置かれ、義肢全体の**適合評価**や部品数増大に伴う**機能評価**と**調整作業**の寄与が乏しい

参考	完成用部品登録件数	1981年（制度設計当時）	148件
		2015年	2075件

② データに基づく試算

試算条件

- 人件費についてはR4年度実態調査により得られた義肢担当者の時給を使用
 - 材料費についてはR4年度実態調査により得られた材料費および国リハ研究部での購入実績費用を使用。
 - 製作時間については国リハ研究部での製作時間計測値を使用。
 - 販売原価(a)についてはS53, 54の調査研究の算出式とi~iiiのデータを基に算出。
- 試算の一例（基本価格と製作要素価格のみ）

採型区分（骨格構造）	販売原価 (a)	支給基準額 (b)	利益率 $(b)-(a)/(b) \times 100$
B-1（股義足：カナダ式）	¥177,151	¥179,100	1%
B-4（下腿義足：PTB式）	¥147,371	¥157,900	6%

完成用部品価格については利益率の計算でほぼ相殺されるため表記せず。

- 義肢の利益率は基準制定時の想定（10%）より低い。
- 高位切断の方が利益率が低い。

※あくまでも試算であるので、調査による検証が必要

3. 分析結果が示すもの

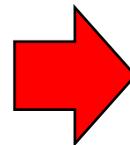
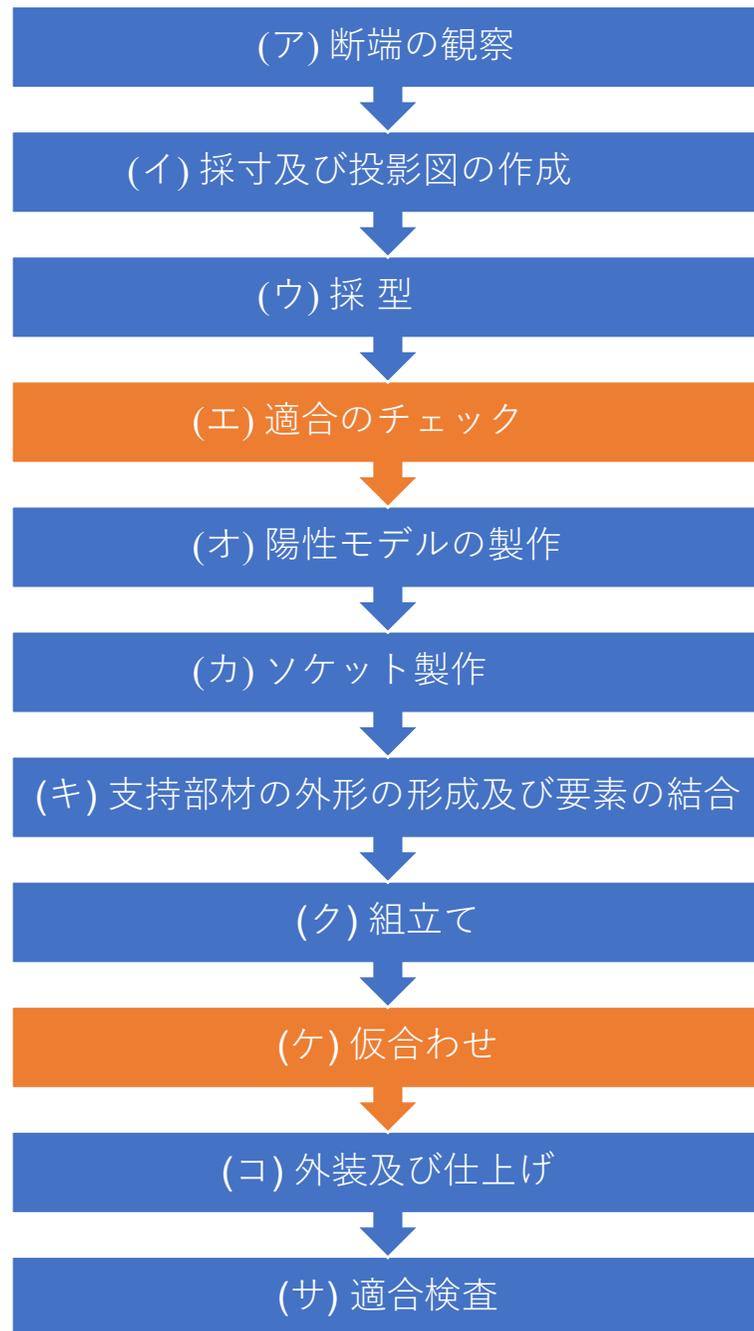
- **制度設計当時の想定と現状は大きく乖離している。**

現実との乖離が生む弊害

- 採算ギリギリの価格設定のため失敗のリスクが大きい。
 - 適合が十分に見極められないまま納品されることにより、不適合による使われない義肢が生まれ、費用の無駄。
 - 部品検討の機会が限られており、真に必要な機能が見極められない結果、使用者のADL/QOLが制限される。
 - 使用実績のある仮義足を基準に本義足の仕様が決定されがちであり、本義足での部品選択の機会が失われる。その結果、仮義足の部品もオーバースペックになりがちで医療費の負担増。
 - 自由度が少ないため、新たな技術が普及しにくい。
-
- **切断者を取り巻く状況の変わった現代では、1回の製作で十分に適合した義肢を提供することは、必ずしも容易でない※。**
 - **ソケット適合評価と部品の機能評価の工程を基本工作法に導入し、それをもとに基本価格を新たに設定することが望ましいと考えられる。**
-
- ✓ ただし、複数回の評価については、それが本当に必要であるか、義肢装具の技量不足によるものかを判断するために別途検討が必要。
 - ✓ 義肢装具士の技能向上への対策も同時に進めるべきである。

※参考 国立障害者リハビリテーションセンターにおける下腿切断者30名に対する義足製作（2010年度）において、1回の義足製作における採型回数（評価用義足製作数）を調べたところ、切断原因によって異なり、外傷性切断者15名で平均1.6回、疾病による切断者で平均2.4回であった。

現在の基本工法



見直した基本工法（案）

